歴史街道を行く / 峠シリーズ 第14回
海南市／藤白峠

## 紀伊山地の霊場　熊野の参詣道

ふじしろとうげ

# 藤白峠

「紀伊山地の霊場と参詣道」の世界遺産登録を機に、熊野古道が注目を集めています。かつて平安～鎌倉にかけて、「蟻の熊野詣で」と言われるほど熊野三山へ参る信仰が盛んな時代がありました。なかでも、京の都から淀川を下り、大阪・天満橋付近から陸路を南下、和歌山市を経て海南市、藤白峠を越えて進む「紀伊路ルート」（熊野御幸道）※1は、まさに、当時の上皇をはじめとする貴族たちや、多くの武士や庶民たちが熊野三山へと列をなした道でもありました。整備された車道を通り、途中から古道巡りも可能になった現在ですが、まだ、険しい山道も多く残っています。そんな古道を歩きながら、皆が熊野をめざした時代に思いを馳せてみました。

※1　現在は田辺に至る道を指すが、本来は紀伊半島西部から熊野三山に至るルート全般を指していたとされます。

藤白峠十七丁付近

道中では、幾つもの地蔵が旅人を見守る

熊野三山の遥拝所となっていた藤白神社

## 熊野三山に向かう難行苦行の道、熊野古道

熊野古道は、もともとは熊野街道、江戸時代には小栗街道と呼ばれ、荒々しい神々の魂に触れる「触る道」でもあったとされています。目的地である熊野三山へのルートは数多く、その範囲は熊野三山が鎮座する和歌山県を中心に、京都、大阪、奈良、三重の各県に及んでいます。

京の都から、道中に点在する熊野九十九王子※2に手向けをしながら、行程八十余里、往復平均二十五日の難行苦行の旅であるにもかかわらず、人々は「浄不浄を問わず、貴賤にかかわらず、男女を問わず受け入れてくれる」という信仰から、多くの参拝者が通ったとされますが、当時はあまりにも過酷な急勾配で長い道程のため、整備ができなかったのではないでしょうか？

ここから、熊野古道に入っていく

※2　京都から熊野三山までの途中に、難行苦行の信仰の道をつなぐため設けられていた神社。

## 代々の上皇、法皇が幾度も訪れた藤白神社

彼の藤原定家が“攀じ登る”と表現した、険しい藤白坂へと続く道の途中に藤白神社があります。九十九王子の中でも五躰王子の一つに数えられる藤白神社は、特に格式が高かった藤白王子社の跡。代々の法皇、上皇たちが百回※3にもわたり熊野御幸のたびに休憩・宿泊したことで知られています。神前での歌会が盛大に催され、里人らは神楽、相撲などを奉納し、旅情を慰めたとか。

熊野三山へ何度も後鳥羽上皇と一緒に訪れている定家ですが、さすがに40歳の時は、当時21歳と若い後鳥羽上皇との体力差を痛感し、少々弱音を吐いていたという記録もあります。この時代は、法皇、上皇といえども白装束をまとい、熊野三山まで歩かねばなりませんでした。

藤白神社に安置される薬師如来、阿弥陀如来、千手観音菩薩。このほか、温和な表情で有名な十一面観音菩薩なども

※3　後白河法皇は33回、後鳥羽上皇は28回御幸された記録があります。

## 信仰を広めた鈴木家のルーツを発見

鈴木旧邸の敷地内は、時が止まっているよう

法皇や上皇、大宮人が熊野へ参るには、現地に詳しい案内人の存在が不可欠でした。その役目を担当したのが、熊野三党の鈴木氏※4で、平安中期（1150年）に二十五代重秀が藤白に移り住んだとされています。また、熊野三山になかなか訪れることができない人々のため、全国に三千もの熊野神社を建立し、一族が全国に散って、熊野信仰を広めたとか。全国にその数二百万とも言われる鈴木姓の多くは、この藤白鈴木家がルーツとなります。

※4　その昔、鈴木家の先祖が神武天皇に稲を献上して穂積という姓を授けられ、稲を積んだものを「すすき」と言うことから鈴木姓となり、熊野信仰とともに全国に広がったと言われています。

有間皇子の墓とその横には皇子が詠んだ歌碑も並ぶ

距離を確認する目安にもなった、丁石地蔵

## 万葉の貴公子・有間皇子の悲劇

藤白坂の急勾配は思いのほかきつく、息遣いは荒くなる一方です。途中に、皇位継承の犠牲になった万葉の悲劇の貴公子・有間皇子の墓碑がありました。645年、大化の改新で孝徳天皇を天皇の座に据えた中大兄皇子（後の天智天皇）は、その後、自分の母を皇位につかせて斉明天皇とし、有間皇子を謀議の罪を理由に処刑したのです。碑のある場所には、昔老松があり、そこに藤がまつわって、33年ごとに皇子を偲んで白い花房が垂れたと言います。藤白とは、本来、藤代であったとされていますが、こうした言い伝えや、神が降臨してくる拠り代としての意味もあるそうで、興味深いものがありました。

平安時代の初期に、宮廷絵師の巨勢金岡（こせのかなおか）が、熊野権現の化身である童子との絵描き比べに敗れ、持っていた筆を捨てたという伝説跡です。また、すぐ近くには自然石を硯（すずり）の形に彫った石碑があります。これは先の筆捨松の一件の後、金岡が眼下の絶景をうまく写せず、硯や失敗して描き損じた紙を何枚も捨てたと伝えられている場所です。

この辺りは、長い道程の一部ではありますが、“古代の道路”が多く見られます。おそらく大きな岩が道を塞いでいたため、行き交う人々が安心して参拝できるよう時間をかけ、協力して道を築いたのでしょう。かなりの年代を経ているため、古道の趣きここに極まる、といった印象です。

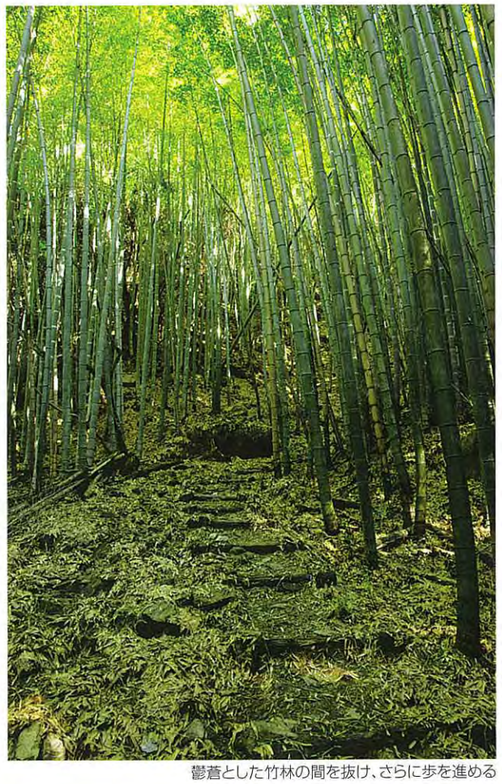
## 峠越えの安全祈願と運賃計算を兼ねた、丁石地蔵

藤白峠まで続く藤白坂の距離は、約2km。その道中には、丁石地蔵と呼ばれている距離を測るためのお地蔵さまが一丁（109m）ごとに置かれていました。この目印のおかげで、古の旅人も道に迷う心配がなく、安心して通行できたそうです。これは元禄の頃、海南市の専念寺に入った全長上人が、藤白坂の正確な距離を明確にするとともに、憩いの場所として道中の安全を祈願するため、藤白峠までの十八丁の間に地蔵を安置したものとされています。お地蔵さまを見て、ほっと安堵した旅人も多かったことでしょう。

時代の変遷とともに、かごが頻繁に利用されるようになると、それぞれのお地蔵さまに順番に記されている数字が、利用区間の運賃計算に役立ったそうです。タクシーのメーターのような役目も果たしていたようです。

## 古代の道路に苦心の跡を発見

昼間も薄暗い雑木林や竹林の中は、まるで時が止まっているように静かです。筆捨松跡が見えてきました。



鬱蒼とした竹林の間を抜け、さらに歩を進める

「御所の芝」からは、海南港のパノラマが広がる

旅人も、この風景で疲れを癒したことでしょう

## 海から登った？地蔵菩薩に夢と安心・安全を託す

本堂内に座っている姿が珍しい、峠のお地蔵さん

やっと藤白峠を登りきると、地蔵峰寺（じぞうぶじ）に到着。“峠のお地蔵さん”として親しまれている地蔵菩薩座像（石地蔵）は3mを超える大きなもので、本堂の中に鎮座している非常に珍しい地蔵尊として知られています。光背の銘によると、元亭3年（1323年）、時の名工、伊行経（いゆきつね）が、和泉産の砂岩から造ったという記述があります。地蔵、本堂ともに重要文化財に指定されており、全国から観光客や歴史マニアが見学に訪れるそうです。お地蔵さんの姿は、峠越えで疲れてひと休み、といった印象です。

現在、地蔵峰寺は檀家の方々がお世話をしています。本堂内にかけられている古い額には、海から上がってきた輝く地蔵菩薩が、藤白峠に登った様子が描かれており、天女によって運び上げられたという伝承がありますが、実際には当時の村人が急峻で充分整備がされていない坂道を運んでいたことを思うと当時の苦労が偲ばれます。

その村人の心の中には、身内の安全・安心を願う心と、熊野詣に向かう人々の旅程の安全を祈願する気持ちが込められていたのではないでしょうか。

近年になり、ここから先は生活道路も整備されましたが、これは檀家の方々が資金を出し合った結果だと伺いました。

寺の裏手にある「御所の芝」に立つと、和歌浦湾や淡路島の絶景が広がっています。古の旅人たちと同様に、「紀伊国名所図絵」で“熊野路第一の美景なり”と称された大パノラマを眺めていると、「明日への礎」の役割と夢が次第にふくらんでいくのを感じました。

本堂内の「天女がお地蔵さんを海から運んできた絵」

参考資料：
藤白神社「熊野古道ガイドマップ　熊野への道」（大阪・和歌山篇）
「万葉の〈藤白のみ坂〉コースガイド」

取材協力：
藤白神社宮司　吉田 昌生さん
海南市下津町　池田 政美さん、池田 豊子さん